

第5回 ニッケピュアハート エッセー大賞

<高校の部 優秀賞>

私の友達、セーラー服

芦沢仁美

ふと制服に目をやってみる。隣にある中一の妹の真新しいセーラー服と比べるとやっぱり薄汚れていることに気づき苦笑した。セーラーの衿のラインは茶色くなっているし、校名の刺しゅうのほつれも目立つ。そりゃそうだよね、もう三年間着続けてきたのだもの。制服が好きだ。小さい頃見ていたアニメの影響で将来絶対セーラー服を着たいとずっと思いつづけてきた。決まった中学は制服を着なくていいという校則だったが、私はいちはやく制服を購入し、念願のセーラー服に袖を通すことができた。それからというもの、多くの時間をこの制服とともに過ごしてきた。部活の汗だって、カサを忘れた日の雨だって、人間関係に悩んでこぼした涙だって何も言わず吸いこんでくれた。そんなに大それたものではないけれど、確かに私の過ごしてきた三年間、それも青春と呼ばれる三年間のまぎれもない証明が、しっかりとここにあるのだ。そう思うと奴は急に可愛く見えてきて、なんだか幼なじみが一人増えたようなくすぐったい気持ちになった。私がこの制服を着て学校へ通えるのも、あと三年を切った。最近高校へ入ってからは面倒くさいからとあまり着ていなかったセーラー服だが、もう一度入学した時の気持ちに戻って、こいつをたくさん学校に着て行ってやろう。そして私の残りの三年弱をたっぷり染みこませてあげよう。それがお世話になってきた、この制服への恩返しになると思った。

ふとまた制服の方を見やると、妹のものと比べて薄汚れた、でも少し誇らしげな、私の三年間が、そこにあった。